主催　二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「レオン・ド・ロニーと 19 世紀欧州東洋学」

予稿集

日時　2019.7.13(土) 14:55-17:35(講演会)
14(日) 10:00-15:00(シンポジウム)

会場　二松学舎大学 九段校舎 13(土) 1 号館 2F 201 教室
14(日) 4 号館 6F4061 教室

―スケジュール―

第 1 日 :13(土)14:55-17:35(講演会)

14:55-15:10 調査概要「レオン・ド・ロニー旧蔵資料の調査報告」

町 泉寿郎（二松学舎大学教授・SRF 研究代表者）

15:10-16:10 基調講演「19 世紀欧州東洋学におけるレオン・ド・ロニーの位置づけ」

ウィリー・F・ヴァンドゥワラ(ルーヴァン・カトリック大学 名誉教授)

16:20-16:45 調査報告 1「19 世紀のフランス東洋学者ネットワーク ―レオン・ド・ロニーを中心に」

ヴィグル・マティアス(二松学舎大学 講師)

16:45-17:10 調査報告 2「近代ヨーロッパと中国学

―レオン・ド・ロニーの漢籍コレクションを通して―」

牧角 悦子(二松学舎大学 教授)

17:15-17:35 質疑応答

第 2 日 : 14(日) 10:00-15:00(シンポジウム)

10:00-10:05 開会挨拶

10:05-10:45 基調講演「東洋學におけるロシアと西欧の交流――法國漢學を中心として」

高田 時雄（復旦大学 特聘教授・京都大学 名誉教授）

10:45-11:45 講　　演「フランス国立印刷局所蔵活字と

レオン・ド・ロニー作製の日本活字に関して」

テヴェノ・ルシル（フランス国立印刷局 学芸員）

―お昼休憩―

13:15-13:40 調査報告 3「レオン・ド・ロニー旧蔵漢籍の書入れについて」

田中 正樹（二松学舎大学 教授）

13:40-14:05 調査報告 4「レオン・ド・ロニー旧蔵漢籍の特徴について」

清水 信子（二松学舎大学 非常勤講師）

14:05-14:30 調査報告 5「レオン・ド・ロニー旧蔵資料からみる 19 世紀日本」

町 泉寿郎（二松学舎大学 教授）

14:30-15:00 総合討論

15:00　　閉会挨拶

19 世紀欧州東洋学におけるレオン・ド・ロニーの位置づけ

ウィリー・Ｆ・ヴァンドゥワラ（ルーヴァン・カトリック大学 名誉教授）

Léon de Rosny はフランスに於ける近代日本研究の創始者として知られている。彼は確かにフランスにおける最初の日本学主任教授であったが、その活動範囲は、それに止まらず、フランスでは東方学と呼ばれていた学問の著名な代表者であった。当時の東方学は、ナポレオン・ボナパルトのエジプト探検以来、東地中海から日本までの地域、さらにはオセアニアまで含めてのあらゆる言語と文化を多種多様な角度から研究する広範囲な学問であった。

Rosny の多面的学問の業績については、既に多数の論文と学術書が刊行されているが、殆どの場合には、彼の日本学における業績に焦点を絞っているものである。が、実は、日本学を専攻する前にフランスの有名な中国学者、スタニスラス・ジュリアンの指導の下で古典中国語を学習していたし、その後の日本学における業績にも常々その古典中国学の素養を垣間見ることが出来る。本発表では、中国学との関連においてその日本学の様相、特徴、及び長短に焦点を当ててみたいと思う。

ロニーは、中国語とは異なり、日本語の習得は自習に頼らなければならないのであった。これが彼をこの分野での先駆者にした一方で、彼の学術的業績に明らかな限界をも齎した。日本語の学習に当たって、フォン・シーボルトによって日本からライデンに持ち帰られた日中辞典である、槙島照武撰『和漢音釈書言字考』(明和３年刊行)に主に頼っていた。その結果、前時代の宣教師編集になる辞書に対する依拠度は、劇的に減らすことは出来たものの、自分が標榜していた、より近代的な辞書編集は成功に至らなかった。文法の面においても、João　Rodriguez の Arte da lingoa de Iapam 日本大文典の伝統を完全に脱却することも出来なかった。滞日経験もないロニーが 1862 年にフランスを訪れた幕府の使節団と接する際、彼の口語日本語能力に限界があったことを痛感に相違ない。

1863 年、ロスニーはパリの東方諸言語学校で日本語講座の担当者として指名され、1869 年に日本語教授に任命されて、1907 年までその講座を担当し続けた。が、口語の授業は日本人の非常勤講師に委嘱することが多かった。ロニー自身の会話能力については、疑問があったという証言が散見する。彼は、特に文字、書き言葉、古典文学などに関心を持っていた。彼の編集した幾つかの日本語教科書や読本も、文章の読解に重点を置いており、更に、彼の編集した日本文学アンソロジー　『詩歌撰葉』を誇りに思っていたことが示すように、古典文学に深い関心を寄せていた。

『詩歌撰葉』は相当ハイブリッドな編集である。万葉集や百人一首から数十首を選集するももとり、

第１日　基調講演

百人一首のある一首の注釈には、特定の単語の語源を追跡し、その語源を梵語まで遡る単語については、それを梵語文字まで表記するという、多少取り越し苦労の作業も怠らないところさえある。日本語文法書や辞書類原稿にも梵語に対する強い関心が表れていることは、ジュリアンの教訓の影響、およびロズニー自身の仏教への関心を反映していると言えよう。

他方、所謂端唄稽古本も取り入れ、漢詩八首、さらに外国人と花魁との対話の場面を含む滑稽な散文といった特殊な一例も収録している。付録によれば、取り分け『和漢三才図会』などを参照して日本の詩歌の韻律について調査をしたと自負している。

ロニーは古典中国学に対する関心を放棄するどころか、1873 年のスタニスラス・ジュリアンの没後、同氏の中国関係の書籍の遺贈を受けた所為もあって、その興味は再燃されたように見受けられる。1873 年以降日本語に関する独創の研究を出さない一方、東方諸言語学校で日本語を取っている学生の数も減少し始めたことが指摘される。中国語の教科書を含めて中国関係の論文や学術書が日本関係のそれらを徐々上回り、中国学に本腰を入れている観を呈する。

とはいうものの、80 年代には確かに古事記及び日本書記について、博学極まる注釈を付けた仏語翻訳を世に問う。その注釈には漢文を綴っていることについては、日本の学者に自分の解釈に対して叱正を乞うためであると言明している。さらにその訳書の特徴としては、原文を神代の文字と梵字に音訳した文も付け加えていることも指摘できる。これも初期から認めらる、かれの「文字」、漢字、梵語に対する深い関心は、晩年まで弛まないものであったことを物語る。しかし、彼の中国研究への永続的な傾注を最も端的に表しているのは、応募が挫折に終わったものの、1893 年に空席となったフランス学士院の中国学教授職を志願したことである。

19世紀のフランス東洋学者ネットワーク
ーレオン・ド・ロニーを中心にー

ヴィグル・マティアス

三代学者の自筆書簡から19世紀の欧州東洋学者ネットワークを考える

- Julius Heinrich Klaproth (ユリウス・ハインリヒ・クラプロート, 1783-1835)：ドイツに生まれ、パリで活躍した東洋学者。文献学・歴史学・地理学の専門家でもある。中国学の他に、満州語、ロシアのコーカサス地方、ヒエログリフなど幅広い分野の研究を行なった。
- Aignan-Stanislas Julien (エニャン＝スタニスラス・ジュリアン, 1797-1873)：アベル＝レミュザから中国語と満州語を学び、1832年にレミュザをついでコレージュ・ド・フランスの教授となる。
- Léon de Rosny (レオン・ド・ロニー, 1837-1914)：ジュリアンから中国語を学び、1855年頃から独学で日本語も学ぶ。フランスにおいて日本学の先鋒としてよく知られているが、民族学者とアメリカ学者でもあった。

※以前から19世紀の欧州東洋学者についての研究が盛んだが、彼らの学問（研究内容、翻訳作業など）と欧州を訪問した東アジア文人・外交官との交流を中心とする研究が多い。東洋学者のネットワーク、日常活動についての研究が少ない。特に、書簡による情報交換、東洋学に関する文献の購入、論文の出版・公開プロセスについての研究がほとんどない。

※現存されている19世紀の欧州東洋学者の書簡が地理的に分散されており、ロニーなど場合によって少ないので、本研究は東洋学者が残した書簡の徹底的な調査より、今回のロニープロジェクトで発見されてまだ公開されていない書簡から当時の東洋学者ネットワークを考察する。

※ロニーが逝去した後に彼が残した研究ノート、書簡など破棄されたので、二松所蔵のロニー書簡は珍しいものである。今回の調査では、他のロニー関係の書簡は見つからなかった。

クラプロート自筆書簡（22信 二松所蔵）（1）

- 21信は仏文で、1信は独文。11信は受信者の名前がわかるが、11信は宛名が書いてない。13信は日付（年月日）あり、1信は年・月、7信は月・日、1信は日付ない。基本的には短信が多い。
- 先行研究であるHartmut Walravens, *Julius Klaproth (1783-1835): Briefe und Dokumente* (1999)と*Julius Klaproth (1783-1835) Briefwechsel mit Gelehrten* (2002)にも二松所蔵のクラプロート書簡が収録されていない。
- 受信者：1）Louis Gabriel Michaud (ルイ＝ガブリエル・ミショー, 1773-1858, 作家, 歴史家, ブックセラー, 印刷家）、2） Louis Choris (ルイ・ホリス, 1795-1828, 画家, 探検）、3）Jean-Joseph Marcel（ジャン＝ジョゼフ・マルセル, 1776-1854, 植字工, 技師, 言語学者）、4）François Bernard Charmoy (フランソワ・ベルナール・シャルモワ, 1793-1869, 東洋学者）、5）Philipp Franz von Siebold (フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト, 1796-1866, ドイツの医師, 博物学者）、6）Antoine Jean St. Martin (アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン, 1792-1832, 東洋学者）。
- クラプロート自筆書簡の内容: １）文献の返送、貸借、贈呈、購入（14信）; ２）原稿の執筆作業、編集、訂正、締切の延長（6信）; 活字の製造（3信）;　３）学会の運営（2信）

クラプロート自筆書簡（22信 二松所蔵）（2）

→ 書簡はコーカサスについてクラプロートの強い関心を示す
(1820/05/12,1823/3/17,1824/9,1829/8/31,6/3)

- クラプロートは1807年にサンクトペテルブルクアカデミーの正会員としてロシアのコーカサス探検隊に随行し調査を行う。後年、コーカサスに関する研究論文を報告し、コーカサス、中央アジアなどの地理学の発展に大きな貢献をした。
- コーカサスについての主な論文：『一八〇七・〇八年のコーカサス及びグルジア旅行』（1812年独語版, 1814年英語版, 1823年仏語版）、『コーカサス諸語』（1814年独語版, 1827年仏語版）、『東コーカサスの歴史と地理』、『グルジア語彙と文法』（1827年仏文版）など。

クラプロートによるグルジア語活字の製造

- 1822/12/2のアジア協会例会：クラプロートは『Vocabulaire géorgien（グルジア単語）』を刊行するためのグルジア語文字の活字が必要だが、宣教師の活動のために作られた王立印刷局の活字が使いにくいので、新しく活字を製作したいと報告する。
- 1823/6/21日付けの書簡：植字工からグルジア語の文字表をもらったが、よくできていると思わないので、本日の会議で相談したの鋳造過程について報告する。植字工によって作られた文字表が会員に紹介される。
  - 同日付のアジア協会例会:植字工によって作られた文字表がアジア協会の会員に紹介される。
- 1824/1/15日付けの書簡（右下）：1ページ目にグルジア語の字（８字）が書かれている小さい紙が貼っている。追伸として、「手紙に貼ってるのグルジア語の字の試し刷りだが、どう思う？ちょっと訂正が必要だろう」と。
- 1824/2/2のアジア協会例会：　グルジア語文字のスモークプルーフが紹介される。
- 1824/4/29のアジア協会例会：鋳造されたグルジア語文字が紹介される（左下）。
- 1827：『Vocabulaire géorgien （グルジア単語）』が出版される(右上)。

ジュリアン『Correspondance Chinoise』（写本）

・ジュリアンが中国に送った書簡24信の写し（1835/5/15〜1837/3/17）。24通のうち、フランス語の書簡は2点、満州語の書簡は22点。21通はJean-Baptiste Torretteへ送られて、3通は満州語で、宛名が書かれていない。なぜTorretteへの手紙はフランス語と満州語で書かれているか不明。（Jean-Baptiste Torrette（陶若翰、1801-1840)はラザリスト会の宣教師で、マカオで活動した。）

・内容（21頁）については
  - 手紙の紛失（次回から手紙に番号をつける制度導入）。
  - 宣教師が最近中国で購入した書籍。
  - 中国のタムタムの作り方。
  - 木活字の購入。宣教師のため、ラテン・中国語の懐中辞書の印刷。
  - 目録に載せている書籍のタイトルの間違い。
  - 「欽定繙譯五経」の購入と、「礼経」「春秋 」の翻訳。
  - 秘密追伸：Joseph Li（陳李）が中国から送った書籍が届いていない、あるいは全巻が送らなかったなどの不満。

レオン・ド・ロニー自筆書簡

- ロニー自筆書簡は9信、1信は通知。手紙の他に通報文書も幾つかある。ロニーが付属した学会・学校の用箋が使われている。1859/7/20日〜1876/8/28に送られた。

- 全ての手紙は帝国サンクトペテルブルク科学アカデミーのMarie-Félicité Brosset（マリー＝フェリシテ・ブロッセ, 1802-1880）へ送られた。ブロッセはイエズス会の修練所で学業を修めた後パリに出る。レミュザに中国語を学んで、その後アルメニア語・グルジア語の専門家として知られるようになる。1836年にサンクトペテルブルクのアカデミーに招かれて東洋語の教授職を委ねられた。1880年にフランスに帰国する。ロニーはいつブロッセに初めて会ったか不明だが、1859/11/23日付けの手紙には「ロシアで初めて会ってから、いろいろお世話になった」と書いてある。
- 先行研究にはブロッセとの関係、サンクトペテルブルク科学アカデミーのことなどがほんとんど書いてないが、ロニーにとっては情報を求める（情報源）ために、あるいは情報を通信するために、ブロッセとの関係が大事だった。クラプロートもジュリアンもブロッセにも連絡するだ、クラプロートはブロッセがロシアに行く前。

- ロニーは主に自分の研究のために情報を求めたり、自分の研究活動、あるいは民族誌学会などの活動を科学アカデミーに報告するためブロッセに連絡する。

まとめ：19世紀の欧州東洋学者ネットワークの動態・特徴

- 19世紀フランスで活躍した東洋学者の研究活動は書簡による形成された広域ネットワークに支えられた。今回の書簡調査で明らかになったことは
  1) 中国から送られた文献・モノがいくつかのルートを通じてヨーロッパに入った。
  2) パリで活躍した東洋学者にとっては情報を求めるため、あるいは情報を発信するためにサンクスペテルブルクの科学アカデミーが重要な存在であった。
  3) このネットワークが東洋学者以外、さまざまな仲介者（宣教師、銀行員、出版・本屋関係の人、東インド会社関係の人など）によって支えられた。
  4) 文書ネットワークを通じて、東洋学関係の情報だけでなく、モノ（書物、地図、物産、活字）も交換された。
  5) 自分の研究活動を報告するために、このネットワークが特に重要な役割を果たした。

近代ヨーロッパと中国学―レオン・ド・ロニーの漢籍コレクションを通して―

牧角 悦子（二松学舎大学 文学部教授）

レオン・ド・ロニーの漢籍コレクションを見て、最初の印象はその雑多さであった。もちろん、それは未整理の状態であったことによる印象でもあるが、同時に、私自身の携わる中国古典学の秩序とは異なる収集傾向からくる印象でもあった。それは中国の古典籍が、ヨーロッパ風の装丁のなかに収められている、という外見が端的に示すように、ほんらい異質な文化の下に、異なる体系の中にあったものの、無秩序な集積にさえも映ったのである。

中国の古典的秩序は漢代に形成されてより、19 世紀の清朝の滅亡に至るまで一直線に続いている。ヨーロッパに神学の体系があるように、東アジア世界の、それは不変の価値体系であった。儒教と儒教経典を中心におき、経世済民をその最大の目的に掲げ、政策と経済・文化全てにわたって、緻密な論理体系を持つものが、東アジア的古典世界における儒教的秩序である。ロニーのコレクションは、漢籍を扱いながら、その中国古典籍秩序から大きく離れている。それはいったい何を意味するのだろうか。

ヨーロッパにおける中国への関心は、大航海時代の新世界への探検から始まり、宣教師のキリスト教布教時代に大きく展開し、そして近代以降の学術的探求へと進化する。17 世紀以降はフランスが常にその中心であった。特にフランス耶蘇会士の中国布教は、明末から清国初にかけて、王朝の中心部へと接近したことによって、文化レベルで高度であったと同時に、強い政治性を背景に持っていた。典礼問題（儀礼問題）をめぐって、耶蘇会士たちは中国の精神文化に対する理解の精度をそれぞれに高める必要があったからだ。

宣教はいつでも侵略的意図を隠し持っている。耶蘇会士たちがいかに宣教に純粋であったとしても、彼等の中国文化理解は目的遂行に最大の価値を置くという意味で、学術とは異なる。一方の客観性や合理性を背景にもつ近代的な学術は、耶蘇会士たちの中国理解とは異なる場から生まれた。それがアベル・レミュザ、スタニスラス・ジュリアンに始まるシノロジーである。レオン・ド・ロニーは、そのジュリアンの弟子として、ヨーロッパシノロジーの正統を継ぐ者であるといえよう。

しかし、そのロニーのコレクションにもまた、ヨーロッパ的な価値が濃厚に表れている。それは、近代ヨーロッパの中国学のもった大きな特徴の一つなのであるが、今回はそれを具体的に検証してみたい。

東洋學におけるロシアと西歐の交流――法國漢學を中心として

高田 時雄（復旦大学 特聘教授・京都大学 名誉教授）

1715 年、ロシア政府はアルヒマンドリート（掌院）イラリオン・レジャイスキーたちを北京に派遣した。これがロシア正教北京傳道團の最初とされる。その後、この傳道團は約 10 年ごとに交替するかたちで、1864 年第十四次傳道團の任務終了まで 150 年にわたって存在した。そのためロシアはヨーロッパ諸國のなかにあって、唯一ロシアと定期的な交流を保持した國家である。一方、フランスは康熙帝の治政（1662-1722）以來、在華イエズス會士のほとんどを送り出した國であり、本國との通信によって中國事情を詳しく知り得る立場にあった。したがってこの二つの國家の漢學（中國學）が他國に先驅けて發展したことは當然といえる。

漢學先進國としての兩國のあいだには、それぞれの發展段階にしたがって、さまざまな形で少なからざる連携のあったことが觀察される。ここでは幾つかの事例を紹介しつつ、かつてのヨーロッパにおける漢學の動態を知るよすがとしたい。

先ず取り上げるのは、ロシア科學院において最初に中國語の研究に手を染めたバイエル（Gottlieb Siegfried Bayer, 1694-1738）と在北京のフランス人イエズス會士パラナン（Dominique Parrenin, 巴多明 1665-1741）の交流である。キャフタ條約（1727）に關與したパラナンは、ロシア使節を通じて、自らの編になる中國語辭書や中國の書物をバイエルに提供し、その中國學を援助した。バイエルはドイツ人ではあるが、1730 年に Museum Sinicum を公刊したロシア學者であり、草創期ロシア中國學史における佳話ということができる。ちなみにバイエルが所藏していた漢籍や中國學資料は紆餘曲折を經て、現在イギリスのグラスゴー大學ハンター圖書館に歸している。

第二はやはりドイツ人學者で、フランスを據點に活動したクラプロート（Julius Klaproth, 1783-1835）とロシアの關係である。1805 年、クラプロートはゴロフキン伯爵の率いる使節團の中國派遣に際して、ポトツキ伯爵の學術隊に加わり、キャフタに至ったが、1807 年ペテルブルグに歸ると、24 才の若さでアカデミー會員に選任され、また滿漢文書籍の目録編纂を委囑された。1810 年 8 月に編纂された目録は、稿本のままであったが、1841 年 9 月 18 日、スタニスラス・ジュリアンが自ら漢字を書いた複本をロシア科學院に寄贈している。目録編纂を理由にクラプロートが科學院の漢籍を持ち去ったということが後に問題となり、クラプロートはアカデミーから除名されている。

クラプロートの同僚であり、法國漢學の開祖とも稱すべきアベル・レミュザ（Jean-Pierre Abel-Rémusat, 1788-1832）もロシアと關係を持った一人である。ロシアの有名な學者シリング（Paul Ludwig Schilling

von Canstatt, 1786-1837）は電報の原理を發明したことで知られる學者だが、東洋學及び印刷にも深い興味を有した人物で、モンゴル・滿州・漢語の對照辭書を印刷しようとして、レミュザに協力を求めたことがある。レミュザはそれに答えてこれらの文字の活字に關し、自身の經驗をふまえた詳しい意見を開陳した書簡をシリングに送っている。これらはシリングの作成した活字のサンプルとともにロシアのアカデミーに殘されている。またレミュザは 1824 年にシリングの印刷事業についての紹介、批評を行っている（*JA*, 1824, 165-170）。

シャヴァンヌの『西突厥史料』（*Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*, 1903）は一代の碩學による代表的著作の一だが、表紙に「1900 年 8 月 23 日サンクト・ペテルブルグの帝國科學アカデミーに提出」とあるように、もとロシアで刊行されたものである。シャヴァンヌは 1907 年、その北中國調査旅行に際して、自らの學生でもあるロシア學者アレクセーエフ（В.М.Алексеев, 1881-1951）を伴っている。アレクセーエフの旅行記は『古き中國にて』（В старом Китае）としてその死後に出版されているが、シャヴァンヌへの言及が數多く見られる。またアレクセーエフとシャヴァンヌ、ペリオとの往復書簡が 1998 年に出版された。

ペリオ（Paul Pelliot, 1878-1945）は夫人がロシア人だったこともあり、何度かロシアを訪れている。1904 年 7 月ハノイをあとにしたペリオはパリに歸って中央アジア探檢の準備に取りかかるが、下見の意味合いもあってか、彼はまずロシアに赴いている。ペリオはまた探險から歸ったあとの 1910 年に、オルデンブルグ（Сергей Фёдорович Ольденбург, 1863-1934）及びザーレマン（Carl Salemann, 1849-1916）の援助でコズロフの齎したカラホト出土文獻を調査し、札記を殘している（*JA*, 1914, 503-518）。ペリオはまた 1925 年、革命のために交流の途絶えていたソビエト連邦との學術交流を復活させる目的で作られた委員會に委員として參加している。

レオン・ド・ロニー旧蔵漢籍の書入れについて

田中 正樹（二松学舎大学 教授）

リール市図書館が所蔵するレオン・ド・ロニーの旧蔵資料の内、漢籍については、師のスタニスラス・ジュリアン（及びジュリアンの師レミュザ）から引き継いだものと言われているが、その 500 種を超える資料の内容は、数量的な偏りはあるものの、所謂四部分類（経・史・子・集）の全てに亘っており多彩である。その中で、中国思想文献、即ち四書五経などの経部及び荘子などの子部に属する漢籍を数点を取り上げて紹介し、またそこに見られる西欧東洋学者の書き入れについて考えて見たい。

ロニーの蔵書は、所謂「善本」と呼べるものは少ないように思われるが、日本の各図書館で所蔵していない（日本の研究者にとって）希少と思われる資料も散見され、東アジアのみならず西欧諸国に於いてどのような漢籍が翻訳や研究に用いられ、またどのように流通していたのかを知る上でも貴重である。

注目すべきは、東洋学者 Pauthier やジュリアン（或いはロニー）の書き込みが多数みられる資料が存在することで、丁寧にその書き込みを読み解くことで、彼らの学問の在り方や翻訳の技法等について理解を深められる可能性がある。勿論、それらの漢籍には、ジュリアンやロニーが入手した段階で既に書き込みが行われていたもののあり、それらとの識別は厳密に行わなければならないが、例えば『五経』の一つ『尚書』の或る版本は、ほぼ全体にわたって読まれており、多くの書き込みも見られ、また校勘にも留意していた形跡が見られる。

また、日本の研究者が従来あまり注目してこなかった（と思われる）顕著な傾向として、満州語に精通した東洋学者の存在がある。ここ数次に亘る調査で「満漢合璧」の経書類がロニー旧蔵書に何種類か含まれ、その中には Pauthier のものと思われる『論語』のラテン語訳、（フランス語訳）及び中国語、満州語の発音が書き込まれたものもあり、詳細な研究が望まれる。

ジュリアンも『孟子』をラテン語に翻訳しているが、蔵書に満州語との対訳になった『孟子』があり、翻訳の方法を窺う上で興味深い。

ロニー旧蔵の思想文献の調査からは、Pauthier やロニー、ジュリアンの中国思想に対する包括的な理解がどのようなものであったのかを直接的に把握することは困難であるが、書入れられた西欧語の翻訳の仕方や特徴を精査することで、中国思想理解の一端を明らかにできるように思われる。

レオン・ド・ロニー旧蔵の漢籍の特徴について

清水 信子（二松学舎大学 非常勤講師）

○レオン・ド・ロニーとその旧蔵書

日本語・日本学研究、中国語・中国学の研究で知られる 19 世紀後半の東洋学者レオン・ド・ロニー（Leon de Rosny,1837-1914）の旧蔵書は、現在リール市立図書館に所蔵され、そのうち現在ロニー旧蔵と判明する漢籍は約 510 点にのぼる。その中にはロニーの師スタニスラス・ジュリアン（Stanislas Julien,1797-1873）から遺贈されたものや、さらにジュリアンが師のジャン＝ピエール・アベル＝レミュザ（Jean-Pierre Abel-Rémusat,1788-1832）から継承したものも含まれ、各々の書入も多数残されている。よって本旧蔵書は、レミュザからジュリアン、そしてロニーへと続く東洋学への系譜、学術の軌跡が明らかになる重要な資料群となっている。

たとえばレミュザ旧蔵と判明するものには宋・朱熹集伝『詩（奎壁詩経）』（〔明末〕金陵奎壁斎鄭元美刊本）がある。本文内には書入のための白紙が挿まれ、そこにはレミュザによるラテン語の注解が詳密に書き入れられている。

ジュリアン旧蔵については、書入が判明するだけでも 60 点以上にのぼる。ジュリアンには『孟子』のラテン語訳『西講孟子（*Meng Tseu*）』（1824 刊〈刻石堂蔵版〉）や、唐・玄奘『大唐西域記』、清代の白話小説『玉嬌梨』などのフランス語訳があるが、その『西講孟子』や『大唐西域記』、また『玉嬌梨』については師のレミュザがパリで翻刻出版した清代の白話小説『新鐫批評綉像玉嬌梨小伝』（1829 刊〈刻石堂蔵版〉）に注釈、字解を書き入れており、丹念に読解していたことがわかる。その他宋・釈法雲『翻訳名義集』をはじめとした仏典類などにも字解を中心とした書入が見える。

翻ってこれら資料群は漢籍書誌学の面から見ても興味深い。清版を中心とした漢籍には日本に伝存しない文献や、日本に伝来した文献であっても、版が異なり、日本には流通していない版元からの出版も少なくない。一方それらは欧州諸国に現存するものが散見するため、19 世紀当時、中国から輸出された漢籍の版元とその地域、また流通には欧州と日本とでは相違があったことが推測される。

〇蔵書構成

現在ロニー旧蔵と判明する漢籍は 512 点。それらを中国の伝統的図書分類法・四部分類により分類した各点数は以下の通り（その他 8 点）。

▽経部…117

・易類…5　・書類…3　・詩類…5　・礼類…11　・春秋類…12　・四書類…28　・諸経総義類…7

・小学類…46　　（・五経類｛易類、書類、詩類、礼類、春秋類、諸経総義類｝…43）

▽史部…97

・正史類…3　・編年類…6　・紀事本末類…6　・古史類…15　・別史類…4　・雑史類…2

・詔令奏議類…2　・伝記類…3　・時令類…3　・地理類…31　・職官類…4　・政書類…10

・書目類…5　・金石類…1　・史鈔類…2

▽子部…210

・儒家類…6　・兵家類…1　・農家類…5　・医家類…3　・天文算法類…9　・術数類…1

・藝術類…1　・雑家類…10　・類書類…61　・小説家類…6　・釈家類…69　・西教類…10

・道家類…28

▽集部…82

・別集類…3　・総集類…27　・詩文評類…1　・詞曲類…8　・尺牘類…1　・小説類…42

（・子部小説家類＋集部小説類＝48）

一覧すると分野は経史子集の四部にわたり、中国学の古典文献は一通り揃えられている。ただしその点数には多寡があり、比較的点数の多い分野は下線を付した類で、子部釈家類、すなわち仏典類（全体の約 13%）が最も多く、次いで同じく子部の類書類（約 12%）、子部小説家類と集部小説類にかかる小説類（約 9%）、経部小学類に相当する字書類（約 9%）が続く。　次いで史部地理類に相当する地誌類（約 6%）も他類に比して多く、また経部の易類から春秋類と諸経総義類を「五経類」として一括するとその数は地理類を上回る（約 8%）。

仏典類は嘉興蔵大蔵経所収本のほか、日本には伝存していない版が多く、嘉興蔵大蔵経の覆刻本、清雍正年間（1723-1735）の官版（内府刊本）、また広州の海幢寺といった寺社が大蔵経から単行した寺社版などがある。

類書類については、「類書」という中国の世界観、価値基準を示すとともに百科事典的要素も持つという性質上、中国学において大いに資する文献であり、ジュリアン、ロニーも中国社会、文化をとらえ

るため参考としていたのであろう。なお旧蔵の類書には複数点重複しているものもあるため、点数が多くなっている面もある。また小説類については、原則として文言小説が子部小説家類、白話小説が集部小説類に分類されるが、ロニー旧蔵は後者白話小説を多く蔵している。

その他『満漢字合璧四書集註』『満漢合璧西廂記』『満漢合璧三字経註解』『満漢合璧幼学須知』など満州語と漢語が併記された「満漢合璧本」も多分野で蔵しているが、それも本蔵書の特徴の一つである。

これら蔵書全体は子部約 41%、経部約 23%、史部約 19%、集部約 16%という四部構成となっているが、その構成は同時代の日本人の漢学者の蔵書のそれとは相違がみられる。

ロニーと同時代の蔵書として、幕末から明治にかけて幕府の学問所・昌平坂学問所で教授した芳野金陵（1803-1878）旧蔵書、豊後・佐伯藩藩校四教堂教授中島時軒（1836-1903）の旧蔵書を中心とした四教堂関係旧蔵書と比較してみると、芳野旧蔵書は経部約 40%、子部が約 27%、集部約 19%、史部約 14%、四教堂関係旧蔵書は経部約 40%、子部約 19%、集部約 24%、史部約 16%と、いずれも経部の比率が最も高い。この二例は江戸期の知識人の一般的蔵書構成と言っても過言ではなく、江戸期以前の日本では漢文、中国学は「教養」のひとつであり、まずは五経四書などの経書類を基礎文献として必修し、その後諸子類を読み、詩文を修め、史書類を学ぶため、蔵書構成もそれに比例し、経部が多い傾向がある。一方、ロニー旧蔵漢籍の場合、レミュザ、ジュリアン、ロニー各自の関心、研究対象が優先されたものと考えられ、彼らの学術の傾向を如実に現したものであろう。

また旧蔵漢籍全体を通して、日本に流通していない版元からの版本が多数見られ、それも少なからず日本人蔵書の傾向と趣を異にする一因である。

〇出版元

ロニー旧蔵漢籍に見える日本で流通が確認されない出版元の一部を挙げれば以下の通りで、これらの中には欧州に現存するものもある。

・老会賢堂・老会堂（『易経大全会解』『幼学故事尋源』・『増補詩経衍義体注大全合参』）

・酌雅堂・酌雅斎（『書経体注大全合講』・『詩経遵註合講』）

・福文堂（『重訂春秋綱目左伝句解全書』）

・荷経堂（『四書本註択粹』）

・五雲楼・文苑堂（『幼学故事尋源』）

その他、版元の地域として前掲の海幢寺の広州はじめ福建など中国南部の版元が少なくなく、これもまた当時の中国から海外へ輸出された漢籍の出版、および流通状況に大きく関わるものとして、今後さらなる検証事項である。

レオン・ド・ロニー旧蔵資料からみる 19 世紀日本

町 泉寿郎（二松学舎大学 文学部教授）

シーボルト(1796～1866、 Ph.Fr.von Siebold)による 1820 年代の日本初訪時の収集図書は、従来の日本に滞在した欧州人の収書に比べて体系的であり、かつその門人でありより本格的な日本学者であるホフマン（1805～1878、Johann Joseph Hoffmann）が分類整理して目録化したことによって、日本研究の資源としての意義を持った。

パリは欧州における東洋研究・中国研究の先進地域であり、19 世紀初頭に既に中国研究ための蔵書はあったが、日本研究のためのコレクションはまだなかった。東洋語学校で中国語を教わったジュリアン（1797～1862、Stanislas Julien）らの勧めにしたがって、未開拓の日本学を独学で学び始めたロニーは、日本書籍の収集に努め、開国後間もない日本が遣欧使節を派遣すると、これと積極的に交流を持ち、日本の和漢・雅俗にわたる多様な書記言語、前近代日本文献を読解する技能を習得するための実践的なテキストを次々に編纂していった。

ロニー旧蔵の日本書籍については、既にコーニツキー教授の編纂にかかる目録が知られている。それを踏まえた次の問題としては、購入の方法、経路、人的交流を示す資料、ロニーの修学や思考等を示す資料の有無等のことが挙げられよう。ロニーと交友した日本人は数多いが、幕府および政府の使節・洋学者・外交官・浄土真宗関係者・技師などがあり、具体的な人名としては福沢諭吉、福地源一郎、箕作秋坪、松木弘安、原田一道、高島祐啓、池田長発、田中芳男、栗本鋤雲、今村和郎、成島柳北、島地黙雷、松本白華、石川舜台、吉田健作らが挙げられる。

なお管見の限りでは、例えば 20 世紀中葉に蔵書形成された米国の日本書籍は、米国政府の対亜政策を反映した学術的・組織的に明確な意図の下に収集されたものが多く、上記のような日本人との交流や博覧会出陳品など偶然による収集を相当数含むロニー蔵書のような、19 世紀欧州の日本書籍の収集とはやや性格を異にすると思われる。

ロニーがレミュザやジュリアンから継承した漢籍の詳細な内容については他の報告に譲るが、同時代の日本人の蔵書に比して全体的な印象を言えば、経学・諸子学（思想）の文献少なく、仏教・道家の文献は比較的豊富である。歴史文献も少なく、地理・制度に関する文献は比較的豊富である。伝統的な価値観から言えば通俗的な書籍が多く、すべて言語・文字習得のための意味合いが強い。日本に伝本が全くないか、伝本の少ない漢籍が多数含まれており、日本への漢籍の流通経路と欧州への漢籍の流通経路の差異などがあることを思わしめる。

＊＊＊

ロニー旧蔵の日本書籍・漢籍を通じた一特徴として、周縁・辺境地域への関心の高さが指摘できるように思う。よく知られているように、小笠原諸島の存在を欧州に紹介したのは、1817 年にレミュザ（1788～1832、Jean-Pierre Abel-Remusat）による林子平『三国通覧図説』を情報源とした記事であった。欧州東洋学者が辺境地域に関心を持った時、日本でも同様に辺境地域に関心を持つ学者が多く存在した。例えば、考証学者として著名な大田錦城や吉田篁墩が高く評価した清朝の著述に、七十一撰『西域聞見録』8 巻（1777 年原刊）があり、その和刻本には紀昀『閲微草堂筆記』等のから引用した西域の地名に関する標柱が加えられていて、その関心の高さが分かる。『西域聞見録』はロニー蔵書にも含まれてお

り、東西の学者が共通の漢籍によって情報を得ていたこと、言い換えれば両者の関心が交差していることが窺える。

その他の個別的な問題としては、兵学者・陸軍軍人として知られる原田一道（1830～1910）が 1903 年にロニーから「人種学雑誌」2 冊を送られた際の礼状が残されている。これは、1872～73 年の東本願寺新門主大谷光瑩（現如）の渡欧に随行した松本白華・成島柳北の日記に、原田一道と共にアメリカ・東洋民族学協会（1859 年ロニー設立）に入会したことが記されており、長年にわたってロニーから日本人会員に学会誌が送付されたことを示す資料である。